

パパ・ママ子育て知恵袋

第25回は「他人と違う」

日本人は「他人と違う」ことに敏感です。同じ恰好をして、同じことを言って、同じところで笑い、同じところで怒る。そういうふう生きていく「処世術」を学ぶことは、悪いことではないと思います。でも、そこに強く縛られて、自分が他人と違うことに目をつぶって生きていくと、かなりしんどいわけです。

私は昭和36年生まれです。「男は男らしく、女は女らしくしなさい」と世間様からそう言われて育ちました。でも、思春期後半になって「男だって女々しく泣くんだ」ということに気づきました。そもそも「女々しく」という言葉自体に違和感を感じ始めました。女性があぐらをかいて、ガハハと大声で笑う姿を「カッコいいんじゃないか」と思い始めたのも、その頃です。

今の子供たちが大人になる頃には、男女の性別自体があいまいになるでしょう。それは、とってもよいことだと思います。

中学校に入ったらスカート履かなければいけないというルールにおびえている女児がいます。「男同士なんだから恥ずかしいことあるか」と言われて、一緒の部屋で着替えなければならないことを苦痛に感じている男児がいます。「普通」にいます。

性に関する違和感だけでなく、「自分はどうやら他人とは違うらしい」と気づき始めるのが小学校中学年頃です。

「普通」という基準がわからなくて、言わなくていいことを言ってしまうたり、黙ってじっとしていることが深刻な苦痛であったり、みんながやっていることが本当に何だか訳がわからなくなったりする子は、だんだん「自分は他人と違うからダメな人間なんだ」とか「人と同じことができない、人と考え方が違う自分はバカなんだ」とか思い始めます。

そういう悩みをお子さんが抱えているかも知れません。

もしお子さんが「人と違うこと」で悩んでいるのであれば、「君は君でいい」と言ってあげてください。

お子さんは、きっとその一言から歩み始めるでしょう。